

# [追悼]ノーザンテースト

Northern Taste

## 「日本生産界の至宝よ、 安らかに」

ノーザンテースト  
1971年3月13日生 牡 栗毛  
父Northern Dancer  
母Lady Victoria(父Victoria Park)  
馬主/吉田善哉氏  
調教師/John Cunningham(仏国)  
生産者/Edward P.Taylor(加国)  
通算成績/20戦5勝  
総取得賞金/73万8125フラン、1743ポンド  
主な勝ち鞍/74ラフォレ賞(仏GⅠ)  
73エクリプス賞(仏GⅢ)  
73トーマスブライアン賞(仏GⅢ)



数々の記録を塗り替え、日本の生産界に大きな功績を残したノーザンテーストが2004年12月11日、北海道・早来町の社台スタリオンステーションで老衰のため死亡した。33歳の大往生だった。その死に接し、本誌はこの特集を偉大な種牡馬の生涯に捧げる。

ノーザンテースト産駒のいい馬を売りたい、というのが購買した一番の理由です。

ノーザンテーストを買った頃、海外から日本へやってくる種牡馬のほとんどは中古品でした。競走成績はそれなりだけに種牡馬としてはあまり成功せず、向こうで見切りをつけられた馬を買ってくる。そんなケースが圧倒的に多かったのです。背景には日本の競馬のレベルがこれから上がっていく兆しをみせていたぐらいの時期で、まささらの新品を買いたくても買えなかったという事情があります。ウチも色々な種牡馬を買いましたが、あまり成績はあがりませんでした。しかし種馬というのは牧場の成績を左右する非常に重要な要素のひとつで、言葉をかえれば勝負でもあるわけです。いい馬を見るのが好きで、その頃から米国や欧州のせりによく足を運んでいた私やウチの父親(故・吉田善哉氏)はそんな経験も踏まえて、本当にいい馬はやはり種馬になってからでは買えない。ならば1歳馬のせりでトップクラスの馬を買えば、それを競馬に使う種馬にすれば、種馬になってからでは手が出ないような馬でも買えるのではないか、と考えたのです。後から振り返れば様々な意味でタイミングもよかったですね。アラビアの人だ



吉田照哉氏 F.Nakao

〈独占取材〉

社台ファーム代表

## 吉田照哉氏インタビュー

### 我が人生の 誇りとなった馬へ

ちやロバート・サンクスターのグループが高馬を次々に買い占めていくのはもう少し後のことでした。10万ドル(当時のレートで約3000万円)から20万ドルも出せば、一番いいクラスの馬を買うことができたのです。先にいった中古の種馬でも7〜8000万円から1億円ぐらいはしましたから、決して安い値段ではなかったけれど、「高すぎる」ということもなかった。米国の生産頭数が今ほど多くなく、買う側からすれば選びやすいという側面もありましたし、ウチではその頃ちょうど、成田の牧場用地を半分ぐらい売却したので、資金も比較的潤沢でした。そのお金を北海道の牧場の拡張と馬に振り分けて使ったわけです。

社運をかけた大プロジェクト? いやいや、そんな大袈裟なことではなく、ウチの父親はただ単純に純粋に、いい馬がほしかったんだと思いますよ(笑)。こうしてレイズアナイティヴやラウンドテール、グロースタークといった当時の有名種牡馬の産駒に狙いをつけたわけですが、なかでもノーザンテーストについては「本命」のイメージを持っていた

ました。産駒の評価が本当に高まったのはもう少し後のことですが、すでにニジンスキーが出て成功する兆しを見せ始めていたし、せりを見ているとやはり、ノーザンテーストの子供にはいい馬が多かったのです。ですからノーザンテーストの産駒で、いい馬を売りたい、というのがまずありました。

ノーザンテーストは父親と同じカナダのウインドフィールズ牧場の生産馬ですが、当時のウインドフィールズはニューヨークのサラトガ競馬場で開催されるせりではしか馬を売っていませんでした。それでサラトガのせりに行くと、ウインドフィールズが上場しているノーザンテースト産駒のなかで一番いい馬を買おうと。当時のアメリカの状況を見ると、自然にそういう考えになりました。そしてせりの数日前に現地へ入って馬を見たら、馬体の均整が一番とれていたのがノーザンテーストだったのです。せりの名簿を見て予め狙いはつけていた馬ですが、実際に馬を見たのはそのときがはじめて。やや小柄な印象も受けましたが、ノーザンテーストの産駒は全般的に小さな馬が

石田敏徳=取材・構成  
interview and construction by Toshinori Ishida



**シャダイアイバー**  
1979年2月23日生 牝 鹿毛  
父ノーザンテースト  
母サウオオレンジ(父Delta Judge)  
馬主/吉田善哉氏  
調教師/二本柳俊夫(美浦)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・早来町)  
通算成績/7戦3勝  
主な勝ち鞍/82オークス



**アンバーシャダイ**  
1977年3月10日生 牡 鹿毛  
父ノーザンテースト  
母クリミアンバー(父Ambiopoise)  
馬主/吉田善哉氏  
調教師/二本柳俊夫(美浦)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・早来町)  
通算成績/34戦11勝  
主な勝ち鞍/83天皇賞・春  
81有馬記念  
82・83アメリカJCC  
81黒記念・秋



**ダイナカール**  
1980年5月10日生 牝 鹿毛  
父ノーザンテースト  
母シャダイフェザー(父ガサント)  
馬主/南社台レースホース  
調教師/高橋英夫(美浦)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・白老町)  
通算成績/18戦3勝  
主な勝ち鞍/83オークス



**シャダイソフィア(写真右から2頭め)**  
1980年3月19日生 牝 栗毛  
父ノーザンテースト  
母ルーラースミスレス(父Bold Ruler)  
馬主/吉田善哉氏  
調教師/渡辺栄(栗東)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・早来町)  
通算成績/24戦6勝  
主な勝ち鞍/83桜花賞  
85阪急杯(GⅢ)  
83サファイヤS  
82函館3歳S



**ダイナガリバー**  
1983年3月23日生 牡 鹿毛  
父ノーザンテースト  
母ユアースポート(父バウンティアス)  
馬主/南社台レースホース  
調教師/松山吉三郎(美浦)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・千歳市)  
通算成績/13戦5勝  
主な勝ち鞍/86有馬記念(GⅠ)  
86日本ダービー(GⅠ)  
86共同通信杯4歳S(GⅢ)



**ギャロップダイナ**  
1980年4月25日生 牡 鹿毛  
父ノーザンテースト  
母アスコットラップ(父エルセントウロ)  
馬主/南社台レースホース  
調教師/矢野重(美浦)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・早来町)  
通算成績/42戦10勝(うち海外2戦0勝)  
主な勝ち鞍/86安田記念(GⅠ)  
85天皇賞・秋(GⅠ)  
86東京新聞杯(GⅢ)



**ビッグテースト**  
1998年3月9日生 牡 栗毛  
父ノーザンテースト  
母クラフティワイフ(父Crafty Prospector)  
馬主/南ビッグ  
調教師/中尾正(栗東)  
生産牧場/ノーザンファーム(北海道・早来町)  
通算成績/23戦6勝(うち障害17戦5勝)  
主な勝ち鞍/03中山グランドジャンプ(J・GⅠ)



**アドラブル**  
1989年3月28日生 牝 栗毛  
父ノーザンテースト  
母エコルシュ(父Big Spruce)  
馬主/根岸治男氏  
調教師/小林稔(栗東)  
生産牧場/社台ファーム(北海道・千歳市)  
通算成績/9戦3勝  
主な勝ち鞍/92オークス(GⅠ)

[追悼]ノーザンテースト

は成長力に富んでいたというより、丈夫で能力が高いため、齢を重ねて他の馬がどんどん姿を消していくなかで、「生き残る」という側面が大きかったように思います。パワーのある車のほうが傷みにくいと同じ理屈で、高速で走ってもエンジンが焼けない。つまりは様々な意味で能力がずば抜けていたわけです。

**そばにいるだけで嬉しい、私たちに代わって、守護神のような馬でした。**

同様のことは日本の競馬への適性についてもいえます。日本の競馬が合っていたというより、他に強力なライバルがいなかった日本で種牡馬入りしたことが、あれだけの成功を収めた大きな要因だと思っています。もちろん米国や欧州で種

牡馬入りしても成功はしていたでしょうが、リーディングを取れるレベルまでいけたかとなると正直、分かりません。ただ、2つ上にリファールという馬がいてあの馬とノーザンテーストは競走成績が非常に似ているんですね。同じノーザンダンサーの産駒で小柄な体格、年代もほぼ同じと重なる部分が多かったのですが、そのリファールが種牡馬として大成功しましたから、仮に欧州で種牡馬になっていたとしてもそうなることはありま

でもなく、腹八分目というのを心得ているように目一杯に食べたらしめない。やっぱり長生きする馬ってそういうものですよ。欲をいえばシンザンの長寿記録を塗り替えてはしかなかったけれど、老衰で亡くなったのですから、これは仕方ありません。馬房にヒーターを入れたり、寝起きの際に介助したり、スタッフも一丸となってサポートしてきました。限界まで生きてくれたと思っています。

私たちのグループ、そして私自身にとってもあの馬は礎です。あの馬から続いてきている流れを絶やさないように努力してきたという感覚もあります。この齢まで生きてくれて、いつもあの馬がそばにいてくれるのは凄く嬉しかった。私たちに代わって守護神みたいな存在でした。大体、ウチにいる種牡馬はみんな、ノー

ザンテーストが買ってくれたようなものでしょう。もしノーザンテーストがいなければ、サンデーサイレンスまではたどり着けなかったかもしれない。コロガシ馬券の第一弾目がある馬だったわけですよ(笑)。

僕自身の生産者人生とも、あの馬は完全にオーバーラップしています。自分の一生の中で一番誇れるのはノーザンテーストを買ったこと、その直接の担当者だったことだと思っています。あの馬について僕が思い出すのは現役時代の、馬としてもっとも輝いていた頃の姿ですが、納骨式では父の時代からの、頑張っていた昔の情景などが自然に甦ってきます。今はただ「本当にありがとう」という感謝の気持ちでいっぱいです。

吉田照哉氏インタビュー

落札した後はキーンランドのせりで購入した馬と一緒にケンタッキーの牧場に預かってもらい、その後はノーザンダンサーの産駒だから欧州の競馬場のほうがいいたろうということで、フランスのカニングトン厩舎に預けました。調教師はかなり早くから「この馬は走る」と言っていましたね。デビュー戦は3着だったのかな。でも次にすぐ勝ってエクリプス賞とトーマスブライアン賞を勝って。今から考えるとダービー(5着)は少し距離が長かったのですが、イギリスではなくフランスの2000ギニーに使用していれば勝っていたと思っていますよ。調教師さんの意向で使ったイギリスの

2000ギニーはノアルココ4着、あの馬とは生涯のライバルという感じで、要するにマイル前後のGIでよく顔をあわせていました。なかなか勝てず、ときどき負かすといった関係でしたが、ラフオレ賞を制した旧4歳の秋にはこちらもすっかり欧州のトップマイラーの1頭として認知されていきました。その頃になるとノーザンダンサー産駒のブームにも火がついていきましたから、確か100万ドルぐらいの価格で、売らないか」とのオファーを受けたこともあり。当時の3億円といえは相当な金額ですし、ウチにもあまりお金はなかったのですが、「この馬を売ったら終わりだぞ」と言い聞かせて頑張りました。種牡馬として絶対に成功するという確信もありましたしね。

そう確信できた理由は馬のレベルに尽きます。例えば競走成績だけを見ればノーザンテーストより上の存在は過去にもいたわけです。しかしあのクラスの馬が日本で種牡馬デビューした前例はなかった。加えてノーザンダンサー産駒という血統的な裏付けも持っている。僕らからすれば、この馬は全然レベルが違う。なるのですが、当時は「種牡馬としては体が小さすぎる」との声もよく聞きましたね。ヒンドスタン、テスコボーイと大型の種牡馬が成功していた時代だったので、あまりピンとこなかった人が多かったのだでしょう。まあ、その頃の日本の競馬の常識にあの馬のサイズとか体型とかがあてはまらなかったのは確かですが、僕らは海外の競馬をさんざん見て、今

はこういう馬の時代だ」というのを知っていました。要するに当時の日本のレベルはまだその程度だった、ということなのでしょう。

ですから産駒の成績にも驚きは感じませんでした。ある意味では予想通り、こくなるだろうなと思っては通りでした。実際に牧場で生まれた初年度産駒を見ても腰の筋肉の張り方とか体の均整の取れ方とかが従来の馬とは違っていましたからね。ただこちらの見立てと少し違っていたこともあって、それは「早熟気味のマイラー」にとどまらなかったこと。距離が延びても問題はなかったし、古馬になつてからのほうがさらに走った。これは嬉しい誤算でした。

多く、父親自身も小柄な体格が嫌われてせりて売れ残った経緯がある馬ですから、それはまったく気になりませんでした。ウインドフィールズのほうでも、自分たちが出している馬の中ではこの馬が一番自信を持っていましたしね。

ウインドフィールズはいつも「アナウンズドリザブ」といって、売却希望価格を事前に告知するやり方をとっています。あのときも馬房の前にリザブ価格を報せる紙が張ってあり、それが10万ドルだったのでせりではいきなり「10万ドル」と声をかけました。ところが小柄な体格が嫌われたのか、他には誰も競ってこなかった。せりの鑑定人は一所懸命に釣り上げようとして、「ひと声じゃちよつと淋しい」とか「これは凄くいい馬だ」とかいうわけですよ(笑)。でも結局はそのひと声で終わって手に入れることができませんでした。



現代時代のノーザンテースト。英2000ギニー4着、英ダービー5着と、クラシックでは入着どまりだったが、のちにGIレースを制した(写真提供/社台グループ)